

BC 3000

Grain Loans of Mesopotamia — The Oldest "Interest" in History

メソポタミアの穀物貸付世界最古の「利子」

お金が存在する前に「信用」は生まれていた。シュメール人は大麦を貸し出し、収穫後に利子をつけて返す契約を粘土板に刻んだ。

投資と思考の書齋

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

WHAT HAPPENED

何が起きたか

紀元前3000年頃、メソポタミア（現在のイラク南部）のシュメール人は、農業を基盤とした都市文明を築いていた。

彼らは大麦を貸し出し、収穫後に元本に加えて「追加分」をつけて返す契約を行った。この追加分こそが、人類最古の「利子」である。

契約は粘土板に楔形文字で記録された。貸し手、借り手、貸付量、返済量、返済期日が明記されている。現代のローン契約書と本質的に同じ構造だ。

硬貨はまだ存在しない。貨幣経済が始まる2000年以上前に、信用取引はすでに制度化されていた。

WHY IT HAPPENED

なぜ起きたか

農業社会には、構造的な「時間のギャップ」がある。種をまく時期と収穫の時期は一致しない。

春に種もみが必要な農民は、まだ収穫物を持っていない。一方、前年の余剰を持つ者がいる。この需給のずれを埋める仕組みが求められた。

- 種まき時に大麦を借り、収穫後に返済する
- 貸し手はリスクを負う代わりに「追加分」を受け取る
- 神殿や王宮が貸し手として機能した

利子は「時間の価値」を数値化したものだった。今の大麦と半年後の大麦は同じ価値ではない。この認識が、金融の出発点になった。

WHAT CHANGED

何が変わったか

「将来の収穫を今の消費に変換する」という金融の本質が誕生した。

それまで、余剰物は腐るか消費されるしかなかった。穀物貸付により、余剰は「投資」に変わった。貸した大麦は利子をつけて戻る。資本が増殖する仕組みの原型だ。

同時に、債務の概念も生まれた。借りたものは返さなければならない。返済不能に陥った者は、労働で返済する「債務奴隷」となることもあった。

利子の誕生と債務奴隷の誕生は、同じ粘土板の裏表である。信用は富を生み出す力であると同時に、人を縛る鎖にもなりうる。

後にハンムラビ法典（BC1750年頃）は、大麦貸付の利率上限を年33.3%、銀の貸付を年20%と定めた。金融規制の始まりである。

LEGACY

今に残っているもの

メソポタミアの穀物貸付から5000年。利子の仕組みは人類の経済活動の根幹として生き続けている。

- 住宅ローン、国債、社債 -- あらゆる債務に利子がつく
- 中央銀行の金利政策は経済全体を制御する最強のレバーである
- 「時間の価値」という概念はDCF法など現代の企業価値評価の基礎である
- 利率の上限規制（利息制限法）はハンムラビ法典の直系の子孫だ

「interest（利子）」の語源はラテン語の「interesse（間にある）」。貸す時点と返す時点の「間」に生じる価値。シュメール人が粘土板に刻んだのは、まさにこの「間の価値」だった。

FOR INVESTORS

投資家にとっての意味

- 金利は「時間の価格」である。この認識は、債券投資・DCF分析・複利計算すべての土台になる
- 信用（クレジット）は貨幣より古い。お金の形が変わっても、信用の仕組みは変わらない
- 利子には常に「返済できないリスク」が伴う。信用リスクの管理は5000年前から金融の核心だ
- 規制と自由のバランスも、ハンムラビの時代から続く永遠のテーマである

KEY TERMS

関連用語

利子 (interest)

資金の貸借において、時間の経過に対して支払われる対価。金融の最も基本的な概念。

粘土板

メソポタミアで使われた記録媒体。楔形文字で契約内容が刻まれ、人類最古の会計記録を含む。

シュメール

メソポタミア南部に栄えた人類最古の都市文明。文字・法律・金融の原型を生んだ。

ハンムラビ法典

BC1750年頃のバビロニアの法典。利率上限を含む282条の法律。「目には目を」で知られる。

穀物貸付

大麦などの穀物を貸し出し、収穫後に利子をつけて返済させる仕組み。最古の信用取引。

投資と思考の書齋

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

投資は自己責任です。このサイトの内容は情報提供を目的とし、投資助言ではありません。